題　名　屠所の羊　下　赤い花
作　者　ドーナツ
発行日　2015年1月24日発行
連絡先　twitter：@donut_no_ana
tumblr：http://donut-st.tumblr.com/
※ horirium 様（@horirium）の考案された折本デザイン、楠樹暖様（@kusunokidan）の作成図を使用しています。

屠所の羊　下

赤い花

ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に沿った行動しか許されていないのだろう。

「バカ犬！」

軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

「ぼくを見ろ！　よくもこんな目に遭わせたな！」

獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュアは足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつんざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

「……怪物？」

ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。その間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠吠えを始める。

突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれていた。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を

招集するための行動だったのだ。

怪物は、獣よりもさらに大きい。個体としての力の差は歴然だ。資質の違いについては百も承知なのだろう。『犬』たちが行っているのは集団をもった持久戦である。常に攻撃を組み、急所を狙った攻撃が可能となる。

かもだ。

再び咆哮をあげ、怪物は爪を突き出す。

『森には、恐ろしい怪物がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうよ』

怪物の目的は明らかだ。ヨシュアを捕獲したいのである。ヨシュアが、この場を去れば、戦闘は沈静化するはずだった。だが、ヨシュアは、この事情にまったく斟酌しない。彼は、『犬』たちが怪物にチャンスを与えないのを見計らい、村の境界線を踏み越えた。

怪物の目的は明らかだ。ヨシュアを捕獲したいのである。ヨシュアが、この場を去れば、戦闘は沈静化するはずだった。だが、ヨシュアは、この事情にまったく斟酌しない。彼は、『犬』たちが怪物にチャンスを与えないのを見計らい、村の境界線を踏み越えた。

つい昨日の光で獣と怪物が争い、血を流している。不運な一匹は地に伏し、腹の裂けた獣の内臓が冷えた空気の中で湯気を立てていた。

ヨシュアは、驟雨をよぎった花を続けせていた樹木に近づく。散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関せず、甘い香りを放っている。ヨシュアは枝を折った。遠くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨシュアの顔に笑みが浮かんだ。

ふいの遠雷に驚き、ヨシュアは天を見上げる。しかし、空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシュアの耳に唸り声が響いてくる。

振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシュアに向かい、前傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛

のため体勢が崩れ、獣はよろける。

ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとって幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。

追いかけっこの始まりだ。

雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であったが、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアと

獣が方向を違え、前後しながら走っている。遠目には牧歌的な光景に思えるが、獣はかなりもがいている。

雷鳴のとだけにヨシュアの掌が疼く。手、足、肩の苦痛に苛まれながら天を睨んだ。光の柱がヨシュアを貫いて向かって降りてくる。ヨシュアの躍躍を妨機と見たのだろう。獣はヨシュアへ体当たりした。ヨシュアは、境界の内側へと弾き飛ばされた。光の柱は、ヨシュアのいた場所に立っていた獣を貫いた。

光の中でなすすべのない獣の体は、やがて地面に硬直する。轟音が大気を震わせた。

落雷である。

一連の出来事に恐れをなしたのだろうか。怪物は『犬』たちをあちらこちらに散らばらせた。ヨシュアを一顧だにせず、森の奥へと逃げ去った。ヨシュアは、獣の死体を一か所に集めるとしゃがみ込んだ。

「……死んじゃった？」

ヨシュアは掌で潰れている花を眺めた。花弁の赤が皮膚を染めている。

「ヨシュアー」

かけ寄ってきたのはエリだった。

「何があったの？　すごい音だったけど」

ヨシュアの手に目を留めたエリの顔は、昨日とは別の驚きに彩られる。

「……ヨシュア。きみは、境を越えたの？　どうして？」

「十四年でも大変そうだ。百五十年は、無理だよ。ぼくにはね」

口を開きかけるエリの背後で『犬』たちが慌ただしく動いた。声は次第に大きくなり、空を幾条にも分断する。

「報告している。……『塔』へ行かないと」

エリはヨシュアに肩を貸し、抱き起こした。

「塔？」

「そう。カレブが死んだんだ。屋根の梁から落ちて。みんなも集まってるから」

一人の少年が広場の隅のほうをひっぱっている。ヨシュアは花を足元へ放り投げた。

カレブは草の上に全裸で横たえられていた。首を折ったらしく少年、不信感だが、顔は安らかに見える。

「あの音。何だったの？」

『塔』の周囲に集まっていた一人がエリに尋ねた。

「後でいいかな？　カレブのことがあるから」

ヨシュアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑いである。彼らにとって死は、一定期間が過ぎた後に訪れる決定事項だ。突発的な仲間の早逝を訝り、恐怖に身を震わせている。

エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま十六桁の数字が表示される。

「神様。あなたの知恵と偉大さをお示しください」

光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に並び、『同様の処理となる』と指示がある。

エリは、本をめくっていた。

「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ！」

エリの言葉に四名がカレブを運ぶ。続いて別の日付、番号が打ち出された。

「ヨシュアも中へ」

本を繰っていたエリが再び、命じる。

「どうしてヨシュアも？」

「ヨシュアは、村の境を越えたんだ」

疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した嘔きが辺りを満たす。

「悪いけど、服を脱いでもらえる。カナンの物は『塔』の中に持ち込まないでください」

「うん。迷惑かけてごめん」

ヨシュアは、脱ぎ捨てエリに渡した。筒は、ヨシュアの背丈ほどの高さに伸び上がっている。カレブの隣にヨシュアとカイが立つと鏡や小に下降し始めた。

「さよならー」

ヨシュアは手を振る。大地に足全に接した筒の中でヨシュアとカイの姿は崩れ、白い細かな塵となった。輝きながら天へと昇っていく。

（おわり）

切る

折る

山折り -------- 谷折り